
人鬼

E K A W A R I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人鬼

【Nコード】

N3553W

【作者名】

E K A W A R I

【あらすじ】

人鬼^{ジンキ}。

其れは、金の瞳に尖った耳をもつ、遙か遠くに残された伝承、テングをイメー^{かがくしや}ジして生み出された人造亜種。

生みの親達を食い殺し、地上を生きる人食い亜種達の総称である。

人鬼がこの世に生まれて300年ほどが経った西暦3000年、

人々に追われる一人の男がいた。世にも珍しい黒髪の人鬼、金斗羅^{カナトラ}。

空腹で行き倒れかける男の前に現れたのは、人鬼の天敵たる人妖の

少女、青雷ショウライだった。

「ボクね、金斗羅にお願いがあつてきたんだ」
人鬼の青年と、人妖の少女の、青雷の封印を解くための旅が始まる。

未来もの異能バトルダークファンタジーここに開幕。

01・金斗羅（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

この話は、僕が中三の頃ノートに描いていた漫画のリベンジ的な内容になっており、はつきりいつて目新しい設定とかはとくにない気がしますが、それでも楽しんでいただけたら幸いです。

尚、注意事項としては、主人公陣は善か悪でいったら悪サイドに属していますので、ヒーローズムやヒロインズムはあまり求めにならないでください。

また、にじファンのほうでも連載を抱えていますので、更新速度もあまり速くはありませんが、ご了承ください。

01・金斗羅

ジンキ
人鬼。

其れは、金の瞳に尖った耳をもつ、遙か遠くに残された伝承、テングをイメージして生み出された人造亜種。

生みの親達を食い殺し、地上を生きる人食い亜種達の総称である。

> i30080 — 3032 <

とおくで、こえがきこえる。

「・・・手間どらせやがって」

ごぼり、ごぼりとあわがたちあがる。

めはみえない。からだはうごかない。だけど、わたしは《ぼくは》
《みている》。

「化け物め」

あかい、あかいちにまみれて、よにんのおとこたちが、たがいに
たがいのかたをかしあいながら、ぞうおとぶづつをこめて、なにか
《わたし》をみている《かわいいこと》。

あかいかみのひとに、みどりのかみのひとに、みずいろのかみに、
はいいろのかみのひと。ああ、あかいかみのひととはいいろのかみ
のひとはもう、しにかけだ。にたりと、うごかないはずのくちもと

がわらいをかたどった《たのしいの?》。

やがて、ひとりさり、ふたりさり、みんなばらばらのほうへとあ
るいていなくなった。

ああ、そうだ、わたしは《ぼくは》《ふういん、されたんだった。
わらってしまふ。これで、ほんとうにわたしを《ぼくを》《ふうじ
れるとおもったんだらうか。

ちからをそそぐ。あたえる。じぶんを、ぼくをわたしはつくりあ
げる。

もどおりにはならない。ちいさな、ちいさなぼく。

やがて、それはめをあけて、わたしをみあげた。

ちいさなくちがひらく。

「・・・」

はじめてひらいたのどは、ことばがうまくでなくて、なんどもぼ
くはれんしゅうをした。

「・・・つけ・・・なきや」

もうろうと、ねつをうかされたままにぼくはぼくのもくてきをく
ちにした。

「・・・鬼人オニヒトの・・・をみつけなきや」

ひつよくなちしきはちゃんとわたった。もう、みえなくなるわた
し。でも、ぼくはそこにいる。

「金斗羅カナトラを探さなきや」

じぼりじぼりと、うごかないはずのくちでわたしはわらった。

西暦2500年、地球は滅びの危機に瀕した。戦争と核兵器のぶつかり合い、それに巨大隕石の落下による死灰現象。地上は既に人が住める世界ではなく、人々は我を競って地下シエルターへとその生活の場を移していった。

人類の大激減。かつて、60億を超える種の繁栄を謳歌した人類はその僅か20分の1の3億人にまでその数を落とした。

幸い、災害でも奪いきれない技術力という人々の武器は、地下世界で栄えるためにその真価を発揮する。人工太陽に、擬似的な母なる海の代用品。畑に飼育場。シエルターごとに街は栄え、人以外の生物に関しても、数を調整しながら共存させることに成功した。

過去の教訓は遙か遠く。

人々が地下へ生活の場を移してから200年の月日が経ったところには、3億人まで数を減らしていた人類は15億人にまで達そうとされていた。

かつての大規模争いを知らぬ人々の胸のうちにも欲が沸く。

人々は自分たちの街シエルターだけでは物足りなくなった。

地下で細分化した街はそれひとつが小さな国家である。

そうして、西暦2700年、かつて二ホンと呼ばれていた土地で、ある科学者たちの研究が極秘裏に進められた。

美しく、人を超える力の人と似たものを造る。

それは、大昔の滅んだ伝承から名をとって、TENGUプロジェクトと名づけられた。

人知を超えた力。科学者たちが彼らに求めたのは戦争の兵器としての力だ。自分たちの国を大きくしたい。あれもほしい、これもほしい。それは本能のように人々の欲望としてあった。

でも、それでも容姿はあくまで人間を模して、美しい姿がいい。兵器は戦争が終われば必要なくなる、そのリサイクルのために美しい容姿を科学者は求める。

人にたとえ似ていても、人でないのなら、薄暗い欲望をいくらぶつけてもかまわないだろうと、性奴隷としての機能を求めて。

そうして、生み出された彼ら、彼女らは、科学者の願いどおりに美しく、人知を超えた力を秘めていて・・・そして、科学者の望みとは裏腹に、彼らは兵器にも奴隷にもなり得なかった。

彼らは人食い、肉食の獣。肉類しか体内分解出来ず、その捕食の対象には人間も含まれていたのだ。

生みの親たちを食い殺し、彼らは地下を去る。

誰ももう住まぬ地上を住処に、人としての知能を駆使して、人ならざる強靱な肉体を利用して、地上を花に彼らは種の繁栄を謳歌する。食料を狩る時のみ地下へと降りながら、群れ、増え、まさしく彼らは地上の王者であった。その彼らのことを、祖である三体のうち、最も強かったという「鬼人」より名を取り、金の瞳に尖った耳の、人に良く似た姿の人ならざる彼らは、いつしか「人鬼」と、人々に畏怖と憎悪を込めて呼ばれるようになっていった。

そうして、西暦3000年

「いたぞ、金斗羅だ！」

ハアハアと、息を乱しながら、その青年はこの度忍び込んだ人間の街を駆けていく。そのスピードは人の比ではない。

「本当に金斗羅か？」

「黒髪の人鬼なんだ、間違いがねえ」

そんな人々の声が聞こえているのか、聞こえていないのかもわからぬ有様で、ふらふらの長身の青年は路地を駆け抜ける。

平素ならば・・・人に追いつかれるようなことはありはしない。

だが、ぐると腹を押さえて男は唸る。

見れば、自衛団の奴らが後ろから追ってきている。諦めてくれな
いものか、と思いつつも、ちつといらだたしげに、その黒髪の人鬼、
金斗羅は舌打ちをした。

「俺は、目立ちすぎる」

言葉通り、黒髪の人鬼、金斗羅といえば知らぬ者がいないほどの
有名人だ。

人鬼にしては珍しい漆黒の癖のある長い髪に、身長は180cmを越そうかという長身。常盤色の衣に茶色い七分丈のズボンを身に着けている、とまで情報は人々に行き渡っている。

何より、金斗羅は一人だ。彼がかつて属していた一族『ヤゲツク夜月族』は既に滅び、通常群で動くはずの人鬼だというのに、金斗羅はいつも一人で人里へと現れた。

人間は人鬼には敵わないが、それでも100年ほど前から人鬼の天敵はいる。数は少ないけれど精鋭たる彼らの牙がまっついているとわかっていて、単独行動を起こす人鬼など、よほどの蛮勇の持ち主か知恵足らずと見られてもおかしくはない。

しかし、金斗羅は、一族が滅び、一人で食料調達の度に人間世界ちかに降り立つようになってから、10年、8歳の頃より一人で生き延びてきた。

人間より強い異能をもつとはいえ、その代償として人鬼の寿命は40年程と短い。とはいえ、人鬼が成人するのは15歳といわれている。つまり、8歳というのは、人鬼からしても、か弱い庇護されるべき子供なのだ。けれど、金斗羅は一人で18歳になる現在まで生き延びてきた。そこに金斗羅の潜在能力の高さが垣間見れよう。が、今回ばかりはヤバイかもしれない、と金斗羅は駆けながら思う。

それは、病気とかではなく、また怪我をおったとかでもなく、もっと単純な理由でそう思った。

そう、一言でいうのなら、彼は文字通り飢えていた。

人鬼は、人間よりも腹持ちがよく、食事を口にするのは、3日に1度でも問題がないように出来ている。だが、金斗羅はもう20日近くマトモな食事を口にしていなかった。

今日も、美味しそうな子供がいたのに、捕食する前に見つかって逃げるはめになった。

空きっ腹で逃げるのはつらい。体はふらふらするし、そういえば

水だってもう5日ほど口にしていない。応戦したら食料も手に入るかもしれないけど、そんなことをしたら蟻みたいに沸いて出てくるやつらの相手全部をしなきゃあいけなくなる。そういう面倒は、こんな時でも嫌だった。そも、食べるためでもないのに殺すのは、あまり良い気がしない。

人鬼でありながら、そも金斗羅はあまり争いごとが好きで性質ではなく、勝てる勝てないとかは関係なく、戦う事自体忌避しがちなきらいがあった。

とはいえ、そんな性質のために、人間には最も与しやすい人鬼と見られ、目立ちいつも一人でいることも知られている故に、真つ先に警戒され、狩りの難易度を大幅に引き上げ、自分で自分の首を絞めているようなものではあったのだが。

「クソツタレ」

悪態をつけて、ただ走り抜けた。『逃げるが勝ち』、金斗羅の座右の銘だ。10年前のあの日から、この黒髪の人鬼にとって、生きることとは逃げることだった。

「撒いた・・・か？」

ほつと、息をついて後ろを見やる。シエルターから地上へと出る途中の街道、もう人々の自分を追う声は聞こえてこない。途端、これまでの全力疾走と空腹感に、クラクラと頭が酸欠のように揺れ、彼はずるりとその場に座り込んだ。

「もう・・・動けねえ・・・」

荒い息を吐きながら、金斗羅は自嘲気味に口の端を持ち上げる。足掻く様に生きてきた10年だった。だけど、それもここで終わりか。こんな終わりが俺の死に様か、と。自分で言うのもなんだが、非常に見つとも無い死に方だな、と思った。

ふと、こんな時だからか、もうずっと長いこと思い出すこともなかった、11年前の交流会で出会った少女のことをなんとなく思い出した。カエンツク 火焰族の跡取り娘であった彼女は、多分こんな俺の姿を見

たら「無様ですわ。貴方は人鬼ですよ、夜月の金斗羅です！なんですか、その体たらくは」なんて怒鳴るんだろうか。

く、と想像して楽しくなった。死に掛けていくくせに、随分と俺は自分で思っていた以上に楽観的だったらしい。

目を瞑り、大気に身を任せる。そんな俺の耳に、鈴のなるような少女の声が届いた。

「動けないの？」

目を開く。その少女は前方10メートルほどの場所にいた。

茶色い栗色のさらさらとした長い髪に、美しい造形の顔立ち。その瞳は大きく青い、伝承にきく海のような色をしている。薄紅色の衣に黄色い上着で、ミニ丈のそれを青いリボンで縛っていて、手甲と靴も服と同じく薄紅色で、身長は140cmがあるかどうか。年齢は12歳か13歳くらいであろうか。

（人間の・・・子供ガキ？）

人鬼の五感は人間よりも発達している。なのに、まるで近づいていることに気づかなかった。それほどに、俺は今能力が低下しているということなんだろうか。と、男は思う。

「大丈夫？」

言葉とは裏腹に心配そうな素振りばかりも見せず、少女は興味深そうな顔を浮かべながら、ひよこひよここと金斗羅に近づいてくる。
「・・・おい」

人間の・・・それもこんな子供がする行動として、戸惑いを浮かべて、つい仏心から金斗羅は言った。

「俺は人鬼だ」

人肉をはじめ、肉類のみを口に作る、地上最強の人造亜種。そこには捕食の対象にオマエも勿論含まれているのだぞ、とこんな飢え死に仕掛けの状態でも、警告の意を込めてそんな言葉を吐くあたりが、なんだかんだと聞いてこの男のお人よしな所以ともいえた。

何がおかしいのか、その言葉をきいて少女はきょとんと、一瞬大

きな青い瞳を見開くと、ついでくすくすくすと心底おかしそうな笑い声を立てる。

「そんなの、知ってるよお」

「ああ、そうかい」

ならば、遠慮は不要と、爪をばきばきと立てて。

「なら、食われても文句はいわねえなッ」

そのまま駆け出して・・・少女が口元に笑う姿が見えた・・・引き裂こうとした。

瞬間バチリと、大気が拒絶するように、金斗羅は弾き飛ばされていた。

「いきなり、ひどいなあ」

くすくすくすと、笑う少女。その豊かな髪が風になびいて、ふあさと、後ろに広がり、何が起きたのかと暫し固まっていた金斗羅に、その理由を露呈していた。

「お前・・・人妖か!?」

少女の耳は人間のそれではなく、人鬼のような尖った耳をしていた。しかし、瞳の色は金色ではない。そして人鬼の力を弾く能力、そこから答えはもう出たようなものだった。

ヒトアヤ人妖、人間と人鬼の間に生まれる異能種。人鬼の天敵である。

人妖は、基本的に人鬼のような異能や超人的な身体能力をもっていることは殆どなく、そういう面に関しては人間並みだし、摂取する食事も人間とそう変わらない。しかし、その代わり、自分自身で異能を操ることは出来ずとも、人鬼の力を問答無用で中和、無効化する能力をもって生まれるといわれている。つまり、彼ら彼女らに對して人鬼は攻撃することが出来ないのだ。

彼らと相對するのならば、せいぜい、群れと集團の強みをいかして、周囲を攻撃して突破口を開くしかない。だが、それは協力する仲間がいたらの話で。人鬼と人妖が一對一で出会えば、たとえどんな強力な人鬼であろうと、敵うことはないと言われている。故にこそ、天敵。

人が育て上げ、人鬼に対抗するために用意したジョーカー、それが人妖なのだ。

(・・・俺が、狙いか?)

どうする。相手が人妖ではどうしようもない。と、金斗羅は焦る思考で考える。

少女はそんな金斗羅の焦燥などしつたことではないといわんばかりに・・・いや、寧ろそんな風に焦る金斗羅の姿を見ることも楽しくて仕方がないかのように、微笑みながら、告げた。

「ボクの名前は青雷ショウライだよ。青ショウって呼んで

にこにここと笑って告げる少女の思考が理解できなくて、金斗羅は固まる。

「あのね、ボクね、金斗羅にお願いがあってきたんだ」

「俺を・・・知っているのか」

つい、緊張をごまかすようにそんなどうでもいいことを聞いてしまった。

少女、青雷というらしい・・・は、ますます楽しそうに「そんなの知ってるよお」と笑ってはしゃいだ。

「世にも珍しい黒髪の人鬼で、緑とピンクと茶色なんてセンスの悪い、色彩感覚の狂ったへんてこりんな服をきたド派手な人鬼だって有名だもん」

そんなときでもないだろうに、センスの悪いと、へんてこという言葉について、金斗羅はへこんだ。

「おい、生きてる?」

暢気に少女は、ぺちぺちと、金斗羅の肩を叩いた。

「それでね、ボク、さっきも言ったけど、金斗羅にお願いがあるんだけど」

「人妖が、俺に、何を願うってんだ」

苛立たしげに吐き出す。そもそも、俺は死にかけだ。ほついたら数日と経たず息絶えるだろう。大体人妖ってのは、基本的に人間の味方をする生き物だ。それが人鬼を頼るなど、胡散臭いにも程が

ある。

「あのね、ボクの本体って封印されているんだ」

「は……？」

思わず目を見開く。何を言ってるんだ、こいつ。

「今のボクは分身体なんだ。だから、金斗羅にボクの封印を解いてほしいんだ」

青雷はこちらの戸惑いなど知ったことではないかのようにマイペースに言葉を続ける。

「さて、意味がわからない。そもそも何でそんなことを俺に言う？」

「金斗羅じゃないと駄目だからだよ」

それまでになく、真剣な青い目で、少女は黒髪青年を見据えた。
……次の瞬間には、また元の飄々とした笑顔に戻っていたが。

「勿論、ただとはいわないよ。金斗、死にそうなんでしょ？」

にこつと、見た目ならばとても愛くるしく、でもどことなく不吉な笑顔を湛えて、少女は笑って言う。

「……」

それにYESと答えるのもNOと答えるのも不愉快で、つい口を閉ざして成り行きを見守った。

少女は、岩壁から、どさりと、二つの荷物を取り出して、金斗羅の前においた。

ひとつは、一本の豪華なダガーナイフだった。黄金細工の美しいダガーで、取っ手の先端には大きな黄水晶、他にも青い宝石がところどころに散りばめられており、その優美な姿から観賞用を思わせる。職人技の代物だ。おそらくは、高値で売れると思われる。

そしてもうひとつは、干し肉の燻製。見た瞬間、ごくろと思わず唾を飲み込んだ。

「ボクの封印を解いてくれるならば、あげるよ」

悪魔の囁きのように、少女は言った。

確かにほしい。どちらも喉から手が出るようにほしい。

だが……面倒は御免だ。

そこで、金斗羅が出した結論。

(逃げるが勝ちってな！！)

バツ、とその二つを抱えて、金斗羅は死にかけとは思えぬ有様で駆けた。

大体、何故人妖のお願いなど聞かねばならない。そも、いくら人妖が人鬼の天敵とはいえ、基本的に人妖の身体能力とは、人間と大差がないはずである。で、あるからこそ、金斗羅はこのまま自分が逃げ切れるものだ、と、そう確信していた。少女がその姿を見て、口元に笑みを浮かべていることすら気づかぬまま。強いて敗因を挙げるのならば、そう、彼は冷静に見えても結局は、飢えのあまり冷静な思考能力をなくしていたということ。

青雷から離れた距離が、100メートルに達しようかという、その時だった。

「・・・ツギ、ギヤアアアア・・・!?」

とんでもないボルト圧力の雷撃が彼の身を襲ったのは。これだけ弱っていた体で、それでも死ななかつたあたり、彼も大概丈夫だと言えた。

くすくす、と笑いながら少女は言う。

「あ、ごめーん。言い忘れていたけど、その剣、ボクから100メートル以上離れると放電するように出来ているんだー」

ものすごく楽しそうに、歌うような声で、そんな新事実を告げにくる青雷。

「なっ、なっ」

ぱくぱくと、口を開いたり閉じたりを繰り返しながら、金斗羅は絶句して少女を見上げる。

「ついでに、その剣握った瞬間から、所有権が金斗に移ったからさー、捨てようとしてももう捨てられないよ?」

え、これ呪いの剣?なんてことを汗をたらたら流しながら考える金斗羅に、無情に微笑み、青雷はトドメの一言を放った。

「ね、金斗。ボクのお願ひ聞いてくれるよね」

にっこり。これ以上はないってくらいにいい笑顔で、美しい造形の少女は勝利の宣言をあげた。

「もう・・・勝手にしろ」

この時の言動で後に苦しめられることも知らず、青年はがっくりとうなだれてそれを受け入れた。

こうして、黒髪の人鬼、金斗羅^{カナトラ}と、謎の人妖の少女、青雷^{シヨウライ}は此処に出会い、旅立った。

そう、この日、この瞬間に金斗羅は、青雷の糸につかまっていたのだと、もう逃れることの出来ない宿命に絡めとられていたのだと、今は知らず、青年と少女を月だけが照らし出していた。

続く

01・金斗羅（後書き）

というわけで、第一話でした。

次回は簡単にプロフィールを挟みたいと思っています。

登場人物プロフィール？（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

というわけで（？）（予告どおり、金斗羅と青雷のプロフィールになります）。

登場人物プロフィール？

名前 / 金斗羅^{カナトラ}

性別 / 男。

身長・体重 / 182 cm 76 kg。

年齢 / 18歳。

イメージカラー / 黄金色。

備考 / 主人公。

> i 3 0 3 2 3 — 3 0 3 2 <

^{ヤゲツク}夜月族の長の息子として生まれる。人鬼としては珍しい黒髪の子主であり、彼の髪色は一族でも稀有なものだった。

夜月族は、始祖たる三人の人鬼の中で、最も強く人鬼という言葉の語源となった人鬼「^{オニヒト}鬼人」の子孫の中でも最も血が濃い一族といわれており、人鬼の一族の中でも最強種といわれていたが、10年前何らかの要因で滅んだようであり、金斗羅はその唯一の生き残りである。一族滅亡もその目で見ており、彼のトラウマや、「逃げるが勝ち」という座右の銘は此処から生まれている。

『夜月族』の特殊能力は『感応共鳴』。念が染み込んだ遺跡や、書物などに接することによって、そこから当時の情景などを垣間見、亡霊の声を聞くという、人鬼でも前例のない異能。ただし、この能力が戦闘の役に立つことはないし、この能力を知っているのも金斗羅本人と、死んだ夜月族の仲間たちだけである。

戦闘に関しては天才的な才を持ち合わせてはいるものの、本人の性格はあまり好戦的ではなく、争い事自体忌避しがちな性質をもっており、無駄な殺生は好まないし、汚い言葉遣いで誤魔化されがち

だが、臆病で気弱で引つ込み思案。ここ10年で大分擦れたよう
いて、根は良い所の坊ちゃんである。その為、たからほぼ才能の持ち腐れ
状態である。

飢え死にしかけのところ、青雷につかまり、ほぼ強制的に彼女の
封印を解く旅に出る羽目になる。

11年前の交流会とやらで、カエンソク火焰族の跡取り娘他と知り合っ
てらしい・・・？

名前 / シヨウライ青雷。

性別 / 女。

身長・体重 / 138cm 36kg (本体は158cm 48kg)

年齢 / 肉体年齢は13歳。(本体は17歳)

スリーサイズ / B65、W52、H66。(本体はB82、W5

7、H83)

イメージカラー / 青色。

備考 / ヒロイン。

> i 3 0 3 4 8 — 3 0 3 2 <

人間の父親と、人鬼の母親との間に生まれる、ポッド生まれ。詳
細は不明。

数々の謎に包まれており、冒頭で4人の人鬼の長達の手によつて、
キヌカクジアト(日本という国がまだ機能していたときに、大昔建
てられたという黄金の建物、金閣寺がかつてあった場所としてそう
伝えられている)に封印されたのだが、何ゆえわざわざ封印され
かなどは不明。

人鬼の天敵種たる人妖ヒトアヤだが、通常人妖は、人鬼の力を無効化する
ことは出来ても、身体能力は人間と変わらず、他に異能は持ち合わ

せてはいないといわれているが、彼女から離れると放電する剣を金斗羅に渡したことといい、本体が封印されても分身体を作って本人の意思で動かせることといい、どうやらただの人妖ではないらしい。

・・・？

性格は無邪気で明るく見えて、腹黒でしたたか。サドっ気が強く、ヤンデレとかではなく、素でドメスティックバイオレンス的な性質をもっていて、主にその性癖を金斗羅相手に発揮している、ボクっ子。

実は二重人格だったりするが、もう一人の人格とは雰囲気やイメージが真逆で、それに伴い言葉遣いも全く異なっているながらも、どちらの人格も腹黒で非道で外道だったりするという共通点がある。

わざわざ金斗羅を頼ってやってきたことには何か理由があるらしい・・・？

登場人物プロフィール？（後書き）

というわけでプロフィールでした、次回は第一章である「疾風族編」
がはじまります。

第一の敵とのバトル。お楽しみに・・・？

02・目的（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。
んで、「疾風族の里編」スタート。毎度章始めにその章のイメージイラストつけようかと思っています。今回の画材はぺんてる筆ペンとコピック。緑暴の旦那の胸毛描くのが楽しかったで・・・げふんげふん。
つつても、今回の話ではまだ疾風族の里についてないんですけどね。今回の話は青雷さんの外道っぷりが見所ですよ。

02・目的

わかりますか？この出会いは偶然ではなく、必然であること。

鬼人オニヒトの血を濃く受け継ぐ貴方のおわりは、300年前から決まっていた。

> i i 3 0 5 2 9 | 3 0 3 2 <

02・目的

嗚呼、これは夢だと思った。

金斗羅カナトラと、その名を呼ばれる。自身の名だ。

この世は重苦しいものばかりだけれど、それでもまだ父や母、仲間が生きていたいつかの日。

自分に微笑む母の顔、輪郭だけでぼんやりして顔は思い出せやしない。

ゆらゆらと、夢の中なんだから、少しくらい見せてくれてもいいだろうに、俺自身が覚えていないことは見せられないとでもいうのだろうか。

それでも夢の母は笑っていた。
笑って幼い俺の頭を撫でる。

それから『強く、ご立派におなりなさい』とそう告げて、そうして、炎に向かって歩き出した。

まってくれ。

あんまりじゃないか。

俺だけ置いていくなんてあんまりじゃないか。

どうして俺だけ置いていくんだ。

くすくす、と炎の中で笑う、みんな。なんで、笑う？

『金斗羅、我らがお前を置いていったのではない』

かつての長が・・・父様が、低い声で静かに言う。

『お前が、我らを置き去りにしたのだ』

(違う・・・俺は、俺は、走って、伝えようと走って・・・そんなつもりじゃなかった)

俺は今どんな顔をしているのだろう。

炎は手招きをする。こっちこっちと、俺を包もうとしている。

(ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい)

ああ、そうだ、俺は・・・。

「金斗、起つきろ〜〜!!!!」

「げぶらッふ!?!」

突如谷間に感じた尋常ではない痛みと共に、金斗羅は現実へと一気に引き戻された。

鈴がなるような少女の声、それが「やっと、おきた〜?おきた〜?」なんていいながら、悶え苦しみ転げまわる青年を楽しそうに見やる。昨日より金斗羅と行動を共にしている人妖の少女、青雷である。

(俺のタマがつ、タマが潰れるかと思つたッ)

うごごごご、といまだ言葉になつていない唸り声を上げながら、黒髪の人鬼、金斗羅は、涙目で少女を睨み付けた。少女は、うん？なんていいながらにこにこしている。まるで、無邪気でわたしなんにも悪いことしていませんといわんばかりの顔だ。それが無性に憎つたらしい。

「てめえ・・・なんつつうこと、しゃがる」

痛みに顔を顰めながら、苦い声で低く吐いて見せても、何処吹く風とばかりに全く堪えていないのが凄く悔しい。

「ん？目、覚めたでしょ？起こしてあげたんだから、ボクに感謝してよね」

「じよ、冗談じゃねえ！どこの世界に男の急所に向かつて全力で飛び乗って起こす奴がいる！？」

あれは、絶対助走つけて、遠くからジャンプして、俺の急所にむかつてダイビングした一撃だった！と、声ならぬ声で断定する。だって、もう、威力が尋常じゃない。自分が他人より丈夫じゃなかったら、きつと今頃男の大事なナニが潰れている。

青雷はふぶん、と目を細めて笑いながら「いつまでも起きない金斗が悪いんだよ。大体潰れていないんだからいいじゃない」とか、可愛い顔して鬼畜なことを言い出してきた。悪魔か、てめえは、と金斗羅が思つても、当然といえば当然だろう。

ふと、あることに気づいて金斗羅は眉を顰める。痛みがなくなつたわけではないが、もう例の位置に受けた攻撃自体を追及する気が失せたあたり、トコトンこの男の身体もタフに出来ていた。

「大体、お前、なんで勝手に俺の名前を略して呼んでるんだ」

「え？呼びやすくもいいじゃない。金斗もボクのことシヨウは、青シヨウって呼べばいいんだし。ていうか、呼べ」

「誰が呼ぶか！つて・・・うわ、なんだこりゃあ！？」

今まであらぬところから漂う痛みシヨウの衝撃や、目の前の少女の相手などで気づいていなかったことに気づいて、金斗羅は吃驚して、叫

ぶ。

「可愛いでしょ」

青雷は、にまにまと悪戯っ子のような笑顔を浮かべて、面白そうに金斗羅の反応を伺った。

金斗羅の、股下まで届かんばかりの癖のある漆黒の長い髪は、三つ網にされて、可愛らしいフリフリのリボンで止められている。犯人は問うまでもなく、目の前の少女であることは明白だった。

「お前っ、ほんとうに何考えてやがんだっ！何が哀しゅうて成人男子がこんな頭して、可愛いなんて言われなきゃならんのだっ」

まあ、自分は成人の儀など受けていないのだが、と内心で付け足して、青雷が寝ている間につけたらしいリボンを剥ぎ取ってから、三つ網を解いた。

(うっ、癖になってる)

元々癖っ気の強い髪が三つ網にされたことによつて、あちこち絡まっているのを見て、実は癖毛を気にしていたらしい金斗羅は地味にへこんだ。それに追い討ちをかけるように、青雷の言葉が続く。

「ボクが可愛いって言ったのはリボンのことだったんだけどな、へー、金斗ったら自分が言われたんだって思ったんだ？へえ？へえ？」

にまにま。面白いことを聞いたという顔をして、少女は愛くるしい顔で、悪魔のように笑う。

「あ……ぐ……」

「まあ、そうだね。こんなことでうるたえて赤くなっちゃったり、青くなっちゃったりしちゃう金斗は可愛いよね。うんうん。ご希望ならこれからもそー呼んであげるよ。ね、金斗ちゃん？」

にっこりと、それはもう鮮やかな嫌なくらいのイイ笑顔で、青雷はそんな宣言をして、金斗羅の頭をよしよしと、まるで愛玩動物にするかのような仕草で撫でた。

「もう……いい」

疲れた、ああもつどうにでもしてくれこの悪魔、なんてことを思

つてがつくりと肩を落とし、ついでふと、金斗羅は、この少女に対して感じていた違和感のようなものの正体に気づく。

昨日は空腹と疲れ、今朝はこの一連のやり取りの騒動で気づかなかったこと。

(・・・こいつ、匂いも気配もありやしねえ・・・)

あの時は、空腹のあまり五感が鈍っていて青雷かのじよの接近に気付かなかったのだとばかり思っていた。だけど、それは変なのだ。

空腹ならば、逆に嗅覚などの感覚は研ぎ澄まされる筈なのだ。それに、全くひつかからなかった少女。彼女が携帯していた食料に関しては、包んでいた布に匂い消し加工があっただけでそのせいかと思えたが、生きている人間は、人間以外も、そこにあるだけで必ず体臭というものがあるはず。其れが無い。

『今のボクは分身体なんだ。だから、金斗羅にボクの封印を解いてほしいんだ』

本人はそういつていた。つまり、匂いがないのも、分身体というやつだからなのか。

でも・・・。

(おかしいじゃないか)

人妖ヒトアヤつてやつは、人鬼の能力を完全無効化する能力、それ以外は全て人間並み。そのはずだ。少なくとも、俺はそう聞いて育った。でも、分身体・・・？分身を生み出す異能など、人鬼でも異端だ。それを人妖の少女が行ったおこなだっただって？それは、金斗羅の常識に照らし合わせれば異常だった。

少女は相変わらずにここにこしている。中身は悪魔のようなやつだが、見た目だけなら伝承に聞く、天使とやらのように愛くるしく、小柄で美しい少女だ。それが、とてつもなくおぞましいもののような気がして、怯えが走りそうな背筋を、意思と虚勢だけで押し止める。ぐつと、右手を握り締める。いつの間にかそのあたりにおいていたはずの豪華な短剣が自分の掌に握られていたが、驚くのはもう

十分だ、無視してそのまま握りこんだ。

「・・・そういえば、聞いてなかったな」

「うん？」

青雷は、ことりと可愛らしい仕草で首をかしげる。

「封印を解けといったな。それは一体どういうことだ。お前は一体俺に、何をさせようとしている？」

昨日は疲れてあれから地上に戻ってすぐに眠りに落ちた。その為聞けなかった、聞かねばならなかったことを口にする。それに、青雷はくすりと、不吉を予感させるような美しい笑みを口元に浮かべて、そうして鈴の鳴るような声で、歌うように男の言葉に回答を連ねていく。

「ボクの本体を封印したのは、人鬼の四つの部族長だよ。『疾風族』ハヤテソク」

「水龍族」スイリウソク 「火焰族」カエンソク 「土石族」ドセキソク の四つの部族。金斗だつて名前ぐ

らい知ってるでしょ？」

「なん・・・だつて？」

知っているなんてもんじゃない。

今上げられた部族は、人鬼界で四大一族といわれている、最大規模の群の名前なのだ。

風の異能を継ぐ疾風族、水の異能を継ぐ水龍族、火の異能を継ぐ火焰族、土の異能を継ぐ土石族。人鬼は全部で大小含めて30ほどの部族があるといわれているが、・・・鬼人の血が最も濃い一族といわれる「夜月」ヤゲツを除けば、他の少数部族はいずれもこの四部族の流れを汲んだ分家のようなものだ。

他の人鬼の一族とは別格。その長達4人によって封印された。それはまるで悪い冗談のようで、知らず金斗羅の口元が泣き笑いのような形を作った。

「封印の地はキヌカクジアト。あそこは靈気が宿っていて、どの人鬼の集落にも近くないからね、都合がよかったんだろうね」

うんうん、と軽い調子で言葉を続ける青雷。まるで現実感がなくて、ふわふわと自分の足元が浮いているような錯覚を金斗羅は覚え

た。

「それでね、ボクの封印の解き方なんだけどさ、金斗にあげた剣あるでしょう？今、手に握っているソレね、銘は『金皇鬼』カナオウキって言うんだけど、それにね、ボクを封印した四人の族長の血を吸わせて」「は……？」

なんといったのか、この子供は。言葉は理解できた。でも意味が理解出来ない。

「あ、ごめんごめん。多分もう四人とも死んでる頃だ。うん、本人じゃなくてもいいよ。そのね、四人の部族長の跡継ぎこどもである現頭首で十分だから。でも、本人じゃないからなあ……うん、死ぬまで斬らないときつと駄目だね。うん」

それはまるで、本当に笑うように、無邪気な子供のような様子で笑いながら、そう、青雷は言ったのだ。

「おい……まてよ。俺に、それは俺に……四部族を襲って、その族長を血祭りに上げて来い、とそうお前は言ったのか……？」
胸がむかむかする。吐き気がとまらない。この子供の笑顔が、それは笑顔なのに、なによりもおぞましくて気持ち悪い。これ以上考えたくないんだ。NOと言ってほしい。否定してほしい。

「そうだよ。金皇鬼を使って、この四部族の族長を皆殺しに出来るのはきつと金斗だけだろうからね」

つまり、それは人鬼おれに人鬼どうやくを殺せ、とそう、これは言ったのだ。
「ッ、てめえっ！！」

金斗羅は我を忘れて、我武者羅にこの細い少女の首を掴もうと手をのばして、そして、脳を焼くようなとんでもない電流に弾かれた。
「あ……ぐっ」

立ち上がることにすら出来ぬほどの拒絶の気。それが我が身を苛み、見つとも無く、青年はその大きな身体を地面に転がす。

「駄目だよ、金斗。忘れたの？人鬼である君が人妖ボクを傷つけられるわけがないじゃない」

くすくすと少女はそれはもう優しい声で笑い、それからガツと、

からからと、跳ねるような声でいいながら、血の伝う金斗羅の傷口をぺろりと舐める。その仕草が、自分の巣にかかった獲物を狩るうとする蜘蛛のように、男の目には見えた。

「・・・おま・・・え・・・」

舌が痺れている。声が上手く出ない。でも、何かを訴えないといけないとそう思えて、でも出来ないままに冷たい汗が背筋を流れていく。

「ボクはさ、金斗のその世間知らずなトコ、可愛いなって思うし、好ましいと思うよ？でもね、あんまりにもお綺麗過ぎて・・・グツチャグツチャにしたくなる」

その言葉はまるで呪いのように、愛の囁きのような濃密さで、溶かすように耳朵へと流し込まれていった。

「嫌、なんて言わせないよ。その剣を手にした時から、既に君はボクのモノなんだから」

ぐい、と長く癖のある黒髪を掴んで、無理矢理男を上向かせながら、他者が聞けば誤解しそうなほど優しげな声で、この現実感のない少女は所有者としての宣下を行う。

人妖は人鬼の天敵だ。

それを何よりも象徴するかのような少女は、それでも美しい貌をして毒を撒いていく。

「あ、でもね、ボクだって鬼じゃないからね。ちゃんと、ボクの封印を解くまではボクは金斗の食事の世話は見てあげるよ。金斗の姿じゃ、食料を手に入れるのも一苦労だもんね。うん、それはやってあげる。ふふ、ボク、優しいでしょ」

本当に、その見た目だけならば優しく少女は微笑んでいるのに。

「だから、殺して。4つの長の血を集めて、ボクの本体を封じた結晶に突き刺せば、それでボクの封印は解かれる。そうしたら、金斗だって・・・自由になれるよ・・・？」

その微笑みが何よりも怖かった。

誰よりも何よりも、この少女の笑みが一番怖かった。

「・・・悪魔か、てめえは・・・」

声が震えた。精一杯の強がり、それで言えたのはそれだけだった。

「ふふ、古めかしい言葉を知っているね。金斗羅は。でもね、忘れたの？ボクが悪魔なら、君は鬼なんだよ。人の幻想が生んだ・・・人造の鬼」

「さあ、まずは誰から殺す？」

続く

02・目的（後書き）

というわけで第二話、封印の仕組みについてでした。

青雷さんマジ外道。ちなみに青雷は書いてある分には楽しい子なんです。寧ろ、ヒロインとしては全く愛していない子でもあります。寧ろ、これをヒロインとして愛せるやつがいたとしたら、俺はそいつはマゾに違いないと思っ**て**いるくらいだ。

んでもって、金斗羅は好きとか嫌いとかじゃなくて、書き易い主人公。戦闘の才能はあっても金斗はチキン野郎で臆病でトラウマだらけでそういうところ弱いところが人間（じゃないが）らしくてやりやすい。そんな感じ。

03・指針（前書き）

ばんははろ、EKAWARIIです。

さてさて、漸く疾風族サイドが出てきました今回ですが、戦闘は次回以降な予定です。おさらいと嵐の前の静けさ回。はじまりはじまり。

03・指針

生まれ持った力だけを見たのなら、彼は英雄ヒーローになりえる人物だった。

その生き方次第によっては、彼は英雄ヒーローになるのも夢ではない人物だった。

けれど、能力ちからの強さと精神こころの強さとは決して同等ではない。

英雄は力があるから英雄ではなく、人ふつではないと違う道を選択しても歩いていけるからこそ英雄になれるのだ。

心も体もどちらも揃ってこそ、人は英雄ヒーローになれる。

それを考え見れば、残念ながら彼はあまりにも心が懦弱ほんじんだったすぎた。これはただそれだけの話。

故にこそ、破滅の女神は笑う。

03・指針

今はもう荒れた死の大地。ここに昔は「ニホン」という長い歴史をもつ国があったのだという。けれど、それはもう遠い昔の話。今の人類は地下シェルターを己が住処とし、当時で言う国は消え、強いて言うならば自分たちが住む地下シェルターの街こそが彼らにとっての国だった。言語や民族など、かつて同じ国だったものを示す

残骸にしか過ぎない。

地上とは死灰世界のことだ。マトモな人間は地上になど出ようともしない。

地上がかつて緑豊かな生に満ち溢れた場所であったのは遠い過去だ。人が地上に出たところで、一日と保たず死んでしまふ。地上が浄化されるには少なくともあと400年はかかるというのが、科学者連中の見解だし、何より地上は「人鬼^{じんぎ}」の王国だ。例え、浄化され人が生きていける世界になろうとも、群れ、年月ごとに数を増やす人食い亜種共の巣窟に一体どうして戻ろうと思えるであろうか。

そして、そんな荒廃した地上を渡る影が二つ。世にも珍しい黒髪を長くのばした青年の人鬼と、茶色い髪の愛くるしい顔をした人妖^{ヒトアヤ}の少女が、布を広げて野営の準備をしていた。

「ねえ、金斗^{カナト}、それで、本当にこつちであつているの？」

ぱつちりとした青い目が印象的な人妖の少女、青雷^{シヨウライ}は可愛らしく小首をかしげながらそんな言葉を口にする。

「ああ・・・明日の夕刻にはつくはずだ」

そう答える黒髪の青年・・・今はもう滅んだ人鬼の一族、夜月族の最後の生き残りたる金斗羅^{カナトラ}だ、は明るい少女の様子とは対照的に、苦々しく吐き捨てるような声でそんな言葉を吐く。本人は忌々しく乗り気でないといわんばかりだ。この会話の内実を考えればそれもそのはずといえるのだが。

青年はため息を一つつくと、どことなく縋るような色を宿しながら、「なあ」と少女に声をかける。

「本当に、長^{おほ}だけでいいんだな？」

それは確認だった。少女は笑つて言う。

「そうだよ。必要な血は僕を封じた奴らの直系の血だけだからね」
その笑顔は天使のような愛くるしさで、であるからこそ逆に、そこが金斗羅にとってはとてつもなく不吉で不気味だった。

金斗羅は先日、飢え死にし掛けのところを不本意ながらもこの目の少女・青雷に救われた。

そこで出された交換条件、それは「封印されている青雷の本体の封印を解く」ということ。自分の封印を解くのと引き換えに食料と剣をあげるとそう言われ、逃走に失敗した金斗羅はその方法も知らぬまま頷いた。

その『封印を解く』というのは抽象的な言葉だ。それだけなら何をさせられるのか検討もつかない。だが、後に明かされたその具体的な内容については、それは金斗羅にとっては晴天の霹靂とさえ言えるほどとんでもない方法だった。

そう、その方法とは、彼女を封印したという四つの人鬼の一族の長を皆殺しにして、青雷から渡された、自分から離れることのない一見豪華な金の短剣「金皇鬼」カナオウキにその血を吸わせ、彼女の本体が封じられている結晶に突き刺すということだった。

つまり、それは同族を襲い、殺せという発言も同然で。

金斗羅は人鬼だ。一族が滅んだ後もその掟やモラルは彼の中にしっかりと根付いている。

人鬼からすれば獲物えさといえる人間を殺すのでさえ、食わぬ分は躊躇する男だ。それは命を狙われている場面でもそう。戦うくらいならば逃げるほうを選ぶのがこの男だった。

元々は夜月の長の息子として生まれ、温室育ちだった金斗羅だが、一人で生きること余儀なくされたこの十年で大分擦れ、口こそゴロツキのように悪くなっただけで、それでも戦わずにすむのならばそれが一番だなどとそういう考え方をするような男なのである。それが突然同族を殺せなどといわれて「はい、そうですか」と思えるはずもなく、食って掛かって逆に地へと伏せられた。

人鬼の天敵種たる幼い外見の人妖の少女から、命の恩人であるということをちらつかせられつつのあからさまな恫喝を受け、足蹴にされた屈辱はある。だが、彼の根は善良ではあっても強靱ではないし、救われたというのも事実なので少女に対しての後ろめたさもある。

る。また彼は伝説に並ぶ英雄ヒーローのような我的強さや不屈の心などは持ち合わせていなかった。彼のプライドはそう高いものではないのだ。寧ろ、彼の精神は懦弱で臆病ですらある。だからこそ、嫌悪を覚えずにはいられないその青雷の言い分にも最後、頷いてしまった。

同族を手にかける嫌悪はある。逃げ出せるというのならは今すぐにも逃げ出してしまいたいとすら思っている。それでも、それ以上に金斗羅は「怖い」と思ってしまったのだ。この幼く愛くるしい姿をした人妖の少女が。

自身の死や、見知らぬ誰かを手にかけること以上に、コレが怖いのだ。そう思った。思ってしまった。

それが全ての間違いだとは彼自身わかっている。自覚している。これの言うとおりにするなど・・・何の罪も犯していない四部族の長達を尖兵となって殺してまわるなど、仁義にも劣る行為だと。自分がやるうとしていることは獣畜生にも劣る行為だと知っていて、尚、それ以上にコレと関わり続けるのは恐ろしかった。

自分はもう、逃げられない。逃げられないと知ってしまった。なのに、自分の死よりも青雷のほうが怖いのに、自殺するのもやはりなんだかんだと嫌なのだ。何故、死ななければいけないのか。

確かに嫌だ。何の罪もない者を手にかけるのも、争いだって嫌いだ。でも、見知らぬ4人の命よりも金斗羅にとっては結局自分の命のほうが可愛かったし、彼には信条というほど大層なものではないが、そういうものこそあるけれど、命にかえて守ろうとするほどの誇りも気概も持ち合わせてはいなかった。

それはつまり、それだけの話だ。

そして、やると決めたら道順を決めるのも早かった。

最後、青雷が封印されているキヌカクジアトに向かうとして、4部族の里はバラけて存在している。

だから、近いところからぐるっとまわって最終的にキヌカクジアトに向かうことにした。アオモリにある「疾風族ハヤテツクの里」、ピワコ

にある「水龍族スイリュウソクの里」、イズモにある「火焰族カエンソクの里」、オオサカにある「土石族ドセキソクの里」の順だ。
そして今、金斗羅と青雷は風の異能をもつ人鬼の一族、「疾風族の里」に向かっていた。

一方、疾風族の里。

重苦しい空気の中、里人の中でも特に要人たる大人たちは寄り集まり、深刻な面持ちである報告をまっていた。その最中、ただ一人だけ幼い子供がいた。

若葉匂い立つような萌黄色の髪を三つ綱にして背に垂らし、額に一族色の緑の布を巻き、翠色の、手首がすっぽり隠れるほどに袖の長い衣を身に纏った、年端のいかない幼子だ。その顔は、実年齢らしからぬ無表情さで、子供特有の無邪気さなどかけらも見当たらない。

大人に混じってただ一人の子供なのもあって、この空間で唯一の異質さだ。そして大人たちが幼子に向ける空気も暖かいものとは程遠い。これで居心地悪く感じないものがあるうか。勿論、その幼子・萌黄詞モウキシも感じ取っている。だが、哀しいかな、彼はあまりにも自分の感情を表にあらわすことが下手で苦手な子供だった。故に、萌黄詞がどう感じているかなど、大人たちにわかるう筈がない。いや、一人だけ萌黄詞の感情をこの無表情の中から読んでくれる人はいる。だが、その人は今この部屋にはいない。

扉が開かれた。

先頭は白い髭を生やした老人、続いて身長2m近い壮年の大男が大部屋へと入ってくる。

「緑栄様リョウケイが身罷られました」

ざわりと、周囲が揺れた。

「長が・・・」

「あの時、お止めしていれば・・・」

ざわざわ、大人たちは思い思いに騒ぐ。それに対して、白髪交じりの深緑色の髪を後ろで一つに縛った2m近い大男・・・亡くなつた疾風族の長・緑栄の2つ下の弟である緑暴は、パンパンと手を叩いて「皆、少しは静かにせぬか。これでは兄者も静かに旅立てぬであらう」と低く落ち着いた声で促した。それで、ひとまずの騒ぎは静まるのだが、そのうち、此処に加えられている大人衆の中では比較的若い、二十台後半くらいの人鬼がぼつり、「次の長はどうなると口にしたことよってそれもなくなった。」

「そりゃあ、緑暴様しかあるまい」

「そうとも。緑暴様は武勇に優れた歴戦の戦士よ。それも、緑栄様のたつた一人残された弟御なれば、長は緑暴様こそが相応しい」
「緑暴様ならば安心だ」

そんな風に声高に次々と語られる声達に、内心ため息を吐きたい気持ちになりながら、件の話の中心たる男、緑暴は出来るだけ穏やかに、皆を刺激しないように注意しながら務めて冷静な声を出す。

「あんな。おぬしら、買いかぶるな。拙者は長となれる器ではない。それに、疾風の長は代々直系が継ぐと決まっておる。ならばこの場合、疾風の長を継ぐのは拙者ではなく、兄者の唯一の忘れ形見たる萌黄詞よ。違うか？」

それに、雰囲気怪しい色を纏いはじめる。緑暴の言葉をきっかけに自分に集まったよくない視線を前に、この場の唯一の幼子、萌黄詞は居心地悪げに僅かに肩をすくめた。気付いたものは少ない。

「そうは言われるがな、緑暴どの、萌黄詞は僅か6歳ではないか」
そう言われるとは緑暴もわかつているのだ。通常いくら直系であろうとこんな幼子に長を継がせるような真似はするものではない。だが、それでも緑暴には、萌黄詞を守る為にも継がせなければならぬ事情があった。

「こんな子供が継げるわけがなからう。馬鹿を言われるな」

「そうだ、緑暴どの、冗談も休み休み言われい」

緑暴は、出来うる限り、飄々とした調子で、精悍ながらも人が良さそうな顔立ちに笑みを浮かべながら、甥っ子である萌黄詞の傍に座り、その小さな肩をそっと抱きしめた。震えが小さな肩から自信の無骨な掌に伝わった。

「何を言う。萌黄詞は今幼いが、それでも兄者の子よ。いずれ立派に育ちよう。確かに、いまだ年若いのも事実。故に拙者は萌黄詞が成人するまでは、その後見人として補佐しよう。ならば、問題はなかるう？疾風の長は萌黄詞がなるに相応しい」

「馬鹿を言われるな！」

「そうだ、大体長が死んだのも元はといえばそいつが・・・あ」
空気が冷えていく。

「萌黄詞が、どうした、と？」

失言をこぼした青年に向かって、静かに笑いかける緑暴だったが、笑っているのは表面だけだ。背筋が凍るような殺気が口が過ぎた青年にむかって流れている。

「萌黄詞が、さて、なにかしたのかね？」

「・・・なんでも、ござらん。緑暴殿、申し訳ない。口が、過ぎたようだ」

ふ、っと殺気が消え去る。どつと汗をかいて、殺気を先ほどまで一身に受けていた男はへたりと座り込んだ。

「そうか、では問題はもうなかるう？あとで兄者の葬儀の相談もある。さて、今は小休止といこうではないか。萌黄詞、行こう」

言っつて、人の良さそうな笑みを浮かべて、緑暴は甥っ子の手を引いた。そして、出て行く途中、耳に僅かに届いた誰かの声。

「親殺しの化け物」

紅葉のような手がまた震えた。

(これだから、いかなのだ・・・)

前頭首、緑栄は子室に恵まれぬ男だった。妻と結婚しても10年以上も子供がなく、そうして漸くの末に年をとってから生まれた子

供が萌黄詞だった。

勿論、緑栄は喜んだ。疾風族全てのものが跡継ぎの誕生を祝った。愛されるために生まれた子供だったといえよう。彼の・・・萌黄詞特有の異能の正体が明らかになるまでは。

その日、3歳になったばかりの萌黄詞は、世話係の女性に向かって、自身の母の死に様を詳細に言ったという。まだ、母親は生きているというのに。

そして、次の日母親は死んだ。萌黄詞が詳細に語ったとおりに、一つとて違えることもなく、言ったとおりに死んだのだ。

それからも度々、萌黄詞は不思議な言葉を口にした。そしてそれらは全て真実まこととなったのだ。

そう、萌黄詞固有の異能。それは「未来予知」であった。

条件などはわからない。突然にして見えるというそれを語る萌黄詞。そんな子供が周囲からどう見えるのか。萌黄詞は不気味がられる存在となった。気味が悪いから世話係を辞退させてくれという侍女もまた尽きなかった。

そして、今回の長の死。その一端は確かに、萌黄詞の言葉が原因であったろう。だが、それを承知して旅立つことを選んだのは緑栄なのだ。そのことをわかっているのかわかっていないのか、いやわかりたくないのか。そうして長が死んだ原因を萌黄詞に押し付けたいだけなのだ、彼らは。

しかし、これは今に始まったことではない。

元々感情豊かではなかった萌黄詞はやがて本当に感情をなくしたように、表情が変わることもなくなってしまった。そんな萌黄詞が、緑暴には可愛くて、可哀想で、痛々しかった。

緑暴は、兄とは違って子宝に恵まれぬ、ということとはなかったが、生まれる子供は何故か女子ばかりで、それもつい先日末の子が嫁に行つたのをきつかけに緑暴は家で一人になった。3歳ほど年上であった妻もつい1年ほど前に亡くしている。そんな緑暴にとっては、この幼い甥っ子を守るべき可愛い家族だった。

確かに、自分が長となるのも選択肢としては間違っていないだろう。だが、それを選んだ場合疾風族の群の皆はどう思うであろうか？もし、緑暴が長になってしまえば、萌黄詞は用済みだ。そう考えれば可愛い甥っ子に襲い掛かるうとするものがないとはとても緑暴には思えなかった。

裏を返せば、それほどまでに、萌黄詞の存在は恐れられ、おぞましがられているといえよう。

「バクおじい」

くいくいと、萌黄詞が叔父の手を引く。自分の腰までの背丈の子供がじつと自分を見上げている。その顔は確かに無表情だけれど、ぴよこぴよこその後ろで揺れる三つ綱がまるで尻尾のようで、愛くるしかった。

「む？どうしたのかね？」

いいながら緑暴は、2m近い長身を折り曲げて、甥っ子に視線を合わせて笑顔を浮かべた。

「・・・・・・・・」

萌黄詞が言葉につまる。表情に変わらず、この子供は言葉にも乏しい。口が下手で引つ込み思案。周囲に何を考えているのかわからない、不気味と言われる所以であった。だけど、緑暴はそんなことを気にしたことはなかった。そつと、幼さ特有の柔らかさをもつ、名前どおりの髪色をしたそれに手を伸ばして、大きな手で撫でた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なさい」

一生懸命に言葉をつむぐ。それでさえ、表に出てくる声は堅くて平坦だった。そういう風にしか、萌黄詞は出来なかった。

「ごめ・・・・・・・・なさい・・・ぼくが、いわなか・・・たら」

ただたどしい言葉。揺らぐことさえ上手く出来ない顔。それでも、その心は痛いほどに緑暴には伝わった。

萌黄詞は、つまりは後悔しているのだと。自分が予言を父に言わなければよかったと。短い言葉と表情の中からそう読み取った。だ

からこそ、いつもどおりの笑顔を顔にのせて、静かに諭すような声で呼びかけながら、その萌黄色をした髪を何度も優しく梳いた。

「萌黄詞が謝るようなことはなんもござらんよ」

三つ網が揺れる。

「寧ろ、謝るのは拙者ら大人のほうだわな。おぬしのような子供にこんな顔させてしまうとは、ほんに我が身はふがいない」

それは本心からの言葉だった。それを人の言葉に敏感な子供がわからぬはずはない。ぎゅっと叔父のごつごつと硬くて大きい手を見上げて、「バクおじい」とまた名を呼んで・・・それから、萌黄詞はその小さな体を固くした。

映像が見えた。

まるでフィルムを巻戻すように、情報という名の波が小さな幼子の脳に浸透していく。

黒い黒い真つ黒な髪の侵入者。黄金の短剣を手にして、緑の衣を纏っている。その後ろに張り付くは「災い」。そう、災いが村にやってくる。

映像は進む。

戦う影。漆黒の髪の異端の人鬼と対している、叔父。

(バクおじい・・・！)

血まみれの叔父。真つ赤な血でしとどに濡れている。

「萌黄詞・・・？」

その言葉に我に返った。ぱちり、目を見開く。目の前の叔父は血にまみれてなどいない。でも、その顔が、先ほどまで見ていた映像に重なった。

「・・・・・・ッ」

ガタガタと、気付けば震えていた。言わないといけない。このままでは殺されるのだと、口にしないといけない。でも、それで・・・何が変わるのだろうか？怖かった。怖くて、吐き気がした。それを、目の前の緑暴は違う解釈で受け取った。

つまり、今更ながら、父の死が怖く哀しくなったのだろうと。

ぼんぼんと、大きな手が萌黄詞の小さな背中を叩く。怖いものなどないのだよというように。大きな体で抱きしめながら、そんなふうに何度も自分をあやした。

(ちがう・・・んだよ。バクおじい)

怖いのはそんなことじゃないんだ。貴方を失うことなんだ。それをしてしまったことなんだ。

違うんだと、でも声に出来なくて、そのまま音にならない嗚咽を漏らした。

ただ、一人の自分の味方が死んでしまうのが怖いのに、なのにそれを口に出せなくて、どうしようもなく体の震えがとまらなかった。その顛末を全て知りながら、何も出来ずに、運命の日まで一日を待ちながら、少年はただ大きな叔父の腕の中で震え続けていた。

続く

03・指針（後書き）

というわけで三話でした。

漸く緑暴の旦那と、人鬼界一のシヨタっ子、萌黄詞登場回ですよ。

つうわけで、一人萌黄詞祭り。

> i 3 0 5 3 0 — 3 0 3 2 <

萌黄詞かわいいよ、萌黄詞。おかしいなあ。シヨタコンの気はなかつたはずなんだが。だが、このキャラデザは自分でいうのもなんだが中々秀逸だったような気が。上手く表情に出ない無表情っぷりと歩くたびにきつとびこびこ揺れる三つ網がかわええ。そんな感じ。

04・正面突破(前書き)

ばんははろ、EKAWARIです。

今回の話で漸くバトルにまでこじつきましたが、自分のバトルシーンの描写の稚拙さに泣けてきた。どうやれば生き生きとバトルシーンがかかるのやら。好きなんですけどね、バトルシーン。

04・正面突破

普通からはみ出す力なんていらないと、異端の青年は願って生きてきた。

思うが俥に生きればいいと、美しい少女は嘲笑った。
運命を変える力がほしいと幼子は思った。

守り抜きたいと、無才な身で祈る壮年の男がいた。

全てはバラバラのピースのまま、そうして彼らは巡り会う。

04・正面突破

小柄な愛くるしい顔をした人妖ヒトマヤの少女を背負い、目指す目的地ハヤテシクたる疾風族の里を目指して、世にも珍しい黒髪の人鬼ジンキ、金斗羅カナトラは、死灰降る地上を裸足で駆けていた。

「そっいえばさ」

「・・・なんだよ」

どうやら、暇である件の少女、青雷シヨウライはのほほんとした声で自分をおぶっている青年に話しかける。

「噂によると、人鬼の部族のうち何部族かは数年に一度交流会と称して模擬試合するってボク聞いたことあるんだけど、金斗、それって本当なの？」

なんでわざわざこんな時にそんなことを言い出すんだ、とか思いつつも、根で人が良い金斗羅は「鬼人オニヒトの子孫筋の数部族だけだな

まあ、本当だが、それがどうした」と、律儀に返事した。

「へー。つてことは、夜月族ヤゲツクである金斗も当然それに参加したことがあるんだよね」

「そうだがよ・・・言いたいことあるんならはっきり言え」

ただでさえ嫌なことをこれからさせられる為にイラついているつてのになんだ、と怒気を込めて青年がそう告げると、青雷は「んー、いやね、たいしたことじゃないんだけどー」と暢気な声で続けた。

「それが本当だったら、もしかして金斗つてばこれから行く疾風族の里にも知り合いがいたりするのかな？つて素朴な疑問？」

「はっ、知り合いがいたら襲撃取りやめてもいいってか？」

皮肉った物言いでそう金斗羅が吐き捨てるように口にする、青雷は「まっさか」と至極あっさりその言動を切つて捨てた。

「知り合いかどうかなんて、殺し合いには関係ないじゃない？知人だとかそうでないとか、これから殺そうとしている相手に気にする必要なんてまるでないと思うよ？」

本当に愛くるしく、無邪気にさえ聞こえる声でそう言い切る少女それに、ああお前はそういう奴だろうよと思いつつも薄気味悪くなる。だが、こんな小さな少女に脅えているという事実を表に出すのも癪で、誤魔化すように思いついた言葉を後先考えずに金斗羅は口にした。

「疾風族に知り合いなんていねえ。あの部族は妖狐アヤコと龍牙リュウガの直系子孫の家系だからな。鬼人オニヒトの直系部族である夜月ツキとは接点すらなかった」

言いながらも、その足を止めることはない。そして遠く、木のようなもので作られた集落が目映る。

「見えた」

人間の里に比べればこじんまりしている。だが、人鬼の里としては破格の大きさだ。住民数は400を数える・・・夜月は50人ほどの部族だった。人鬼界でもトップクラスの部族だ。

右手に握る金色の短剣、金皇鬼カナオウキを握り締める。

「昨日説明したと思うけど」

青雷は、耳元で囁くように言葉を連ねる。

「その剣は元々人鬼専用兵器。持ち主の力に反応して大きさを変え、持ち主の力になってくれる。君が振るえば、最大限にその力を発揮してくれるよ」

ちり、と剣が頷くように共鳴をしたような気がした。

「……行くぞ」

先代疾風族の部族長、リョクエイ緑栄の葬儀を物静かに慎ましく終えた、その時にそれは鳴り響いた。

がらんがらんと、数十年ぶりに発せられた、緊急事態を告げる合図である鐘の音を前に、族長の屋敷に集まっていた面々は驚きの面相で顔を付き合わせる。

「た、大変です」

直後、この間成人を迎えたばかりの年若い人鬼が慌てて駆け込んでくる。

「何事だ！」

疾風族の中でも年配の人鬼がそう怒鳴るような声で尋ねると、まだ少年を抜けたばかりだろう人鬼は「襲撃です！」そう信じられないような声で言った。

「襲撃、だと？」

意外な言葉に大人たちは互いに顔を見合わせて驚く。それに、一人だけここにいる幼子……前頭首、緑栄の一人息子である萌黄モウキョウ詞だけ**ロクバク**がびくりと、背を跳ねさせた。その様子を後見人となった叔父の緑暴は見逃すことなく捕らえたが、他の面々は気付いていなかったらしく、そのまま話を続ける。

「まさか……数年前の事件みたいに人妖の奴らが動いたとか？」

「襲撃者は？」

「そ、それが・・・」

年若い人鬼は、他の大人たちに気圧されるようにたじろぎつつ、自分が見てきたものが信じられないような顔をしてその襲撃者の特徴を口にした。

「緑の衣を纏った、長い黒髪の人鬼でした」

それに、聞いたものたちも呆気にとられた。

「夜月族の金斗羅・・・か？」

「何故、うちに？」

基本的に人鬼の他部族同士は交流試合をすることや、餌の調達に行った時鉢合わせした時に争うことくらいなら稀にあっても、互いの里に攻撃をしかけることなどはない。それは、我らは人間と違って同族と殺しあうような愚は犯さないという意味表示の現れでもあり、また人間に比べ圧倒的に人鬼の数が少ないことから、縄張り争いにまで発展することも稀だったことから生まれた人鬼界の暗黙のルールだ。

とはいえ、世の中例外もあるので、たとえば滅多にないケースではあるが、自分の女が他部族のものに奪われた・・・とかそういう時は報復として、相手の男を殺しに他部族に殴り込みをかけるのは黙認されていたりもする。だが、夜月の金斗羅といえば、色々な意味で有名人ゆえに人鬼界でも知らぬものはいないほどではあるが、そういう、疾風族に対する怨恨みたいなものがあるという話は聞いたこともない。故に、彼の襲撃は疾風族の面々から見れば青天の霹靂そのものだった。

そんな他の衆の会話など受け流し、スッ、と緑暴は腰をおとして2m近い長身を折り曲げ、甥っ子である萌黄詞の小さな頭と目線の高さが合うように屈んで、それから、静かな諭すような声で幼子に今回の件のことについて尋ねた。

「知っていたのかね？」

萌黄詞は、僅か迷うように肩を震わせて、それからこくと頷く。それに緑暴は静かな声で「そうか」とそういった。

「萌黄詞、今回の件についてわかることを拙者に教えてはくれぬか？」

「……わざわい」

ぼつり、と萌黄詞は抑揚のかけた声でそう口にする。

「わざわい、くる。きてる。カナトラといっしょ。あれに……かてない」

緑暴は、細めた目を僅か、開けた。

「皆、群に伝言を」

いいながら、2m近い壮年の大男は大音声で族長代理としての決定を下した。

「侵入者に対し、拙者が出る。万が一の為、女子供は隠し通路から退避。男衆は女子供の護衛にあたれいっ」

「バクおじい」

人の良い叔父としての顔から、戦士としての顔に切り替える目の前の男に対して、幼子はおずおずと手を伸ばす。それに、緑暴は適当に捕まえた女に萌黄詞を頼む、と言って無情にも背を向けた。

「バクおじいっ」

言いたいことがある。自分は叔父が行くのを引き止めなければいけない。なぜなら、あれに叔父は勝てない。そう思っているのに、不器用な萌黄詞はこんな時でも意味のある言葉を上手く紡げない。感情を表に出せない。無表情、無感動のまるで人形、行っちゃ嫌だと、そんなことすら言えない。

それに、叔父は一度だけ振り返って「萌黄詞、災いなどすぐに片す。おぬしは大人しくしておるのだぞ」とそんな言葉をかけて笑って行った。

(だめだ)

駄目なんだ、駄目なんだよ、バクおじい。

ああ、そう……ぼくはいつだって見ているだけ、思うとたまらなくなつて、萌黄詞は自分を抱いている女性を弾いて駆けた。

「きゃっ」

女の悲鳴すら遠く、ただ広い背中を目指して萌黄詞は駆けた。

策など無用だ。人鬼の長を引きずり出したくば、正面突破こそが最もわかりやすい近道。そう、割り切れればこれは簡単な話だった。

そう、真っ直ぐに、逃げも隠れもせずに金斗羅は、敵陣へと直接駆け込んだ。

右手には黄金の短剣、金皇鬼。自分を出迎える20人ほどの戦士達を相手に縦横無尽に駆け回り、翻弄する。戦術なんて考える必要すらなく、体が戦い方を知っている、そのことを誰に言われるまでもなく金斗羅は知っていた。そうだ、知っている。忌まわしくすら思っていた生まれつきの才能ちからなのだから。戦えば自分が勝つことは知っていた。けれど、それは金斗羅にとっては呪わしいほど疎ましい事実で、何の訓練もなく、敵の攻撃を見切り、圧倒出来る自分に吐き気染みた嫌悪すら感じながら、もう16人目の戦士の首に左手で手刀を打ち込んでその意識を奪った。

「貴様っ」

数を増やした疾風族の青年たちが憎悪すら込めて自分を見上げ、「何が狙いだ」と口にしながら、疾風族由来の異能である風を操る力を駆使しながら、それでも傷一つつくこともなく自分たち相手に一人で戦舞を舞う黒髪の男に踊りかかりつつ、疑問をぶつけた。

「あんたらの長の首、それだけが狙いだ」

嫌悪感でいっぱいにながら、吐き捨てるように金斗羅はそう言い切って、また一人、別の人鬼の意識を刈った。

「貴様・・・人鬼のくせに・・・血迷ったか、金斗羅!!」

「・・・かもな」

自嘲気味にそう口にしながら、それでも金斗羅が周囲の猛攻を前に傷つくことはなかった。

「皆のもの、そこまでにせよ！」

壮年の男の渋みがかった大音声が響く。

それに、ざっと、男たちが後ろに引いた。

「緑暴様!!」

2 m近い壮年の大男だった。一族色である深緑の髪を後ろで一つに縛っていて、身体付きからして歴戦の戦士であることがわかった。金斗羅もまた、まわりの男たちが止まったことによって自分の動きを止める。

「お初にお目にかかる。夜月の金斗羅殿。拙者、疾風の緑暴と申すもの。しかし、まさかの夜月の御曹司自らこのような辺境の地に来訪なされるとは、想像の範囲外。こうも予想外の人物に尋ねられては持て成しようも思いつかぬ。して、率直に尋ねよう。そのほうの目的はなんですか？」

穏やかな顔をして、でも油断だけは微塵も見せず、そう口にした大男に対し、金斗羅は「さっきもこいつらに言ったんだが・・・」と前置きして、それから金皇鬼をまっすぐに持ち上げた。

「俺の目的は今の長の首だけだ。でだ・・・アンタが長でいいのかわかる？」

言われた緑暴は、別れ際の萌黄詞の様子を思い出した。他の人にわからずとも、自分は誤魔化せぬ。あの子は確かに脅えていた。

(・・・長の首・・・)

つまり、狙いは萌黄詞であった、と。

だが、長は萌黄詞だが、それをこの目の前の青二才は気付いていない。ならば・・・。

「左様。拙者が疾風の長だ」

そう、臆面もなく口にした。

人鬼には3種いる。

一つは一族特有の異能のみを持ち合わせている人鬼。人鬼のうち7割がそれだ。

一つは一族特有の異能のほかに、個人としての特殊な異能を重ねて持ち合わせている人鬼。格部族の長の直系に多いケースではあるが少数派で、萌黄詞がこれにあたる。

一つは・・・人鬼でありながら異能をまともに持ち合わせていない者。稀に生まれる彼らは人間に狙われやすく、人間に捕まれば、人鬼の天敵種たる人妖を作るための種馬として利用しつくされて、非人道的な扱いを受けた結果殺されるのだという。また、人鬼自体にも嫌われ疎まれやすいために、自ら里を逃げ出して人間に捕まってしまう事が多いという。

この身は無才。パターンでいえば、一に述べたケースで、持っているのは一族特有の異能のみであり、しかもそれもそう強力なものでないことを緑暴はよく知っていた。潜在能力などあの子に遠く及びないことはとうにわかっている。自分にあるのは成人してより今までの戦士としての勤めで培ってきた実戦経験だけだ。

長ずれば萌黄詞に全てにおいて抜かれることは知っていた。それでも、萌黄詞を守るのだと緑暴は決めていた。

「左様。拙者が疾風の長だ」

だから、萌黄詞の首を狙っているのだと知って、そう口にした。

それに、金斗羅は、「そうかい。恨みはねえが、くたばってくれ」
「素晴らしい、刃を向ける。」

「皆の衆！下がるがよい、この礼儀知らずの坊主に拙者が礼儀というものを叩き込んでくれる！」

いい、腕に風を纏い、刃とした。

がぎり、金の短剣と風の刃が鏢競り合う。

「ふっ！」

どういう作用か知らぬが、金斗羅が手にしている武器は尋常のものではない。このままでは風を切り裂いて刃が自分の腕を裂く、それがわかって緑暴は風の刃を男に向けて3発発射、瞬間、異常なまでの反射神経で男はそれを避けるように浮き、そのタイミングにあわせて重い右足でもって青年の、自分に比べると随分柔な印象の腹

部を蹴り付けた。とつたか、いや、甘い。岩をも砕く豪足ではあったが、蹴りを放った時、黒髪の青年は既に自分から浮いて後ろに飛んでいた。見た目に反してダメージは殆ど受けていないだろう、それがわかって、ざつと壮年の戦士は素早く型を取って構えた。とはいえ、豪速で蹴り上げた風圧もあり、青年はそのまま空中で10mばかり遠方へと飛ばされていった。そんな不安定な姿で放り出されたというのに、金斗羅は次にはなんでもないかのようにくるりと、宙で一回転し、隙のない所作でもって地へと降り立った。この間3秒ほどの攻防である。

「・・・驚いた。やはり、長となると格が違うんだな」

場に似合わぬような素直な感想を、金斗羅はぼつりともらす。それに、油断なく構えつつ、緑暴は柔和な笑みを口元に貼り付けて穏やかな声で「左様ですか。こちらは些かがっかりしましたぞ」そう口にした。

「『鬼人の再来』と謳われたかの夜月の金斗羅がこのような礼儀も弁えていぬ子供であったとは・・・いや」

笑んだまま、声だけ厳しく緑暴は言い切る。

「その方は戦士と呼ぶことすらおこがましい紛い物だ。その、死んだような目は何だ？死した夜月の面々がこれでは浮かばれぬであろう。おぬしのようなものが同族とは情けなし。来なさい。せめてもの情けだ。矜持すら持ち合わせておらぬ若輩者に礼儀を教示してくれようぞ」

「・・・はっ、熱血は嫌われるぜ、ジイサン」

そして、二人は対峙する。

続く

04・正面突破（後書き）

というわけで4話でした。次回はバトルメインなんですが、ちゃんと書けるのかおら、どきどきしてきました。派手なバトルってどうやって書けばいいんだか。難しいが出来る限り精一杯やらせていただきます。

05・風使い（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

バトルシーンは好きなんです、書くのは下手でまいます。

そんなわけで緑暴×金斗羅のバトルがメインの回。

多分、次回で疾風族の里編は終了です。

05・風使い

個人の器を越えた力を与えられ、それが苦痛なのだとしたら。それはもう、きっと呪いだろう。

05・風使い

はあ、はあと息を切らしながら、表情に乏しい年端もいかぬ幼子・
・疾風族^{ハヤテツク}の跡継ぎたる少年、萌黄詞^{モエギン}は里の中を駆けていた。
自分が行ってもどうにもならないことは、誰に言われるでもなく
わかっている。

だって、あれは「災い」そのものなのだ。あれは、人鬼を滅ぼす
ために生まれた生命。生まれながらの不吉。思えば、あれが人鬼を
滅ぼすことを予言したのがそもその始まりだった。

里で未来視をもつ自分の異能のことを気味悪がられてはいるが、
未来視の異能もちは何も自分だけではない。アレが人鬼を滅ぼす「
災い」であることを予見したのは、萌黄詞の他に2人。水龍族^{スイリュウツク}の巫
女と、土石族^{ドセキツク}の翁もまた、予見した。

だから、人鬼の4部族長は互いに連絡を取り、密かに旅立ったの
だ。『災いを封じてくる』と。

思えば、運命を捻じ曲げるような言葉を発したのはあれが初めて
だった。その結果はどうだったか。

あれほどまでに強かった大きな父親は、内部からボロボロになっ

て帰って来た。それは呪いなのか病なのか。他の部族長の顛末などは知らない。それでも、父親である先代当主である緑栄リョクエイのその姿を見るだけで容易に想像はついた。

そして、捻じ曲げられた運命は、今形を変えて自分たちの前に現れた。『金斗羅カナトラ』という、最も原典オリジナルに近い人鬼を駒にして。

いくなれば、シナリオを描きなおしただけでしかない。

金斗羅オニヒト、鬼人の末裔、彼の者の再来とかつて謳われた神童。土石族伝で聞いた噂。6年に1度、鬼人の末裔部族のうち12の部族で執り行われる交流試合大会。参加者は7〜13歳の子供のみ。ルールは、異能でも武器でも何でも使っていない。殺す以外の方法で相手を圧倒し、気絶させるか、殺す手前まで追い込めば勝ちのトーナメント式の他部族合同試合だ。それに夜月ヤケツの代表として7歳で参加した金斗羅は、最も若かったにも関わらず、1つの傷も負うこともなく優勝したのだという。

そんなことは、交流試合が行われるようになってからの約60年初めてなのだと、そんな噂があった。11年も昔のことなのに、今でも伝説として語り継がれているような噂が。

そして、10年前の夜月族の滅び。それは、地上に滅多に寄越さぬ筈の人妖ヒトアヤを、ありつたけ集めぶつけた末の結末という。それにただ一人生き残った、黒髪の人鬼。金斗羅の名を知らぬ人鬼などいない。

異端。人鬼の世界において彼ほどの異端はそうはいない。

それを駒にして、何をしようとしているのか。理由なんて教えられることも無く、あれを予言した萌黄詞には痛いほどわかっている。災いが形になったもの。それが、あの人妖の正体。いや、あれは確かに人妖ではあるけれど、どの人妖とも違う、全く異なる存在。いくなれば王。人妖の王。おそらくはきつと、「人鬼」を作ろうとしたものが、最も望んだ形に近いモノ。

生まれついで、バケモノなのだ、つまりあの少女は。

今はまだ、極小の力でしかない。けれど、封印が解き放たれたら、

その時は・・・もう、あれを止められなくなる。

でも、自分にとつてはそれは終わった後に起こる話だ。自分がいなくなつた後に起こる話だ。

大切なのは、今。

だから、駆ける。どうしようもない未来をその金の瞳に宿しながら。

何故、こんなことをしているのだろう。そんな自問自答を繰り返していた。空白。身体は心などおかまいなしに、ただ反応する。

「はっ！」

風を纏つた拳が岩をも砕く勢いで迫る。それを黒髪の人鬼の青年は、無我の境地のまま、空中でバク転して避け、次いで息継ぐ間もなくおそいかかる風の刃を、手にした金皇鬼をもつて振り払う。

「・・・！」

確かに切り裂いたはずだったそれを受けて、ぱくりと頬に一筋の傷がついた。見た目より深いにも関わらず出血は殆ど無い。

「そうか、アンタ・・・カマイタチ使いか」

ペロリ、指に唾液をつけて裂けた頬を拭いた。しゅう、と傷は見る見る間に塞がっていく。それを飄々とした顔のまま見ながら、男は「左様」とあっさり口にした。

「して、それがわかつたところで、問題でもあるのかね？」

言いながら老年の戦士は駆けた。風の刃を纏つた右腕で抉りこむような突きを繰り返す。そも、カマイタチ使いである男の拳は当たらなくても十分に凶器だ。拳から飛ばされた風が四方八方を切り裂く。それをわかつていても、それでも金斗羅の様子はかわらず、まるで軽業師のような足取りでステップを踏んで避け、金色の短剣をふるつた。

「ああ・・・仕組みはわかつた」

「何・・・？」

緑暴による猛攻はいまだ続いている。にも関わらず、淡々と、なんでもないことかのように、金斗羅は口にした。

「アンタ・・・長じゃねえな」

その時、金斗羅が何をしたのか、それは・・・緑暴にも見えなかった。そう、まるで川の流れに乗るかのように、彼の動きはあまりにも自然すぎたから。豪腕を繰り出す緑暴の懐のうちに、飛び込んできたのだこの青年は。カマイタチを起こす風の刃は放たれているにも関わらず真っ直ぐに正面から飛び込んできた。なのに、傷一つ負うことはなく、紙一重で全ての攻撃を避けて、大男の右肩腕の付け根を狙って金皇鬼を真っ直ぐに突きたてていた。

ざくり、と筋と筋の間を縫うかのように、余分な神経を傷つけることもなく、金の刃が大男の筋肉を貫く。

「グッウツ・・・！」

低い噛み殺すようなうめき声を小声で僅か漏らして、緑暴は目を細め相手の男を見た。金斗羅は、刃を緑暴の腕の付け根に深々と刺したまま、無理な力を込めることなく大男を息もつきそうなほどの至近距離で押さえ込み、そして言った。

「長ともあるもんが、カマイタチしか使えないなんてありえねえ」
そうだ・・・知っている。誰にいわれるでもなく自分が一番わかっている。この身はあまりに無才。長の子供として生を受けておきながら、兄と違って風の才能はなかった。自分の力など、所詮他の里人と同格が限度だ。他のものにぬきんでいるものがあるとするのならば、永の戦士としての勤めで培われた体術と経験、それだけだ・・・それすら、目の前の青年には碌に通じていないとは皮肉だった。

「もう一度言う。俺の目的は長の首だけだ。出せよ・・・無駄な殺生はしたくない」

その言葉に、カツと怒りが緑暴の胸を揺らした。

「舐めるな、若造」

ぐい、と青年の腕ごと短剣の柄に手をかけ、一気にそれを引き抜

く。ぼたぼた、と大量の血が金斗羅、緑暴両方の顔にかかり、赤く濡らす。其れを見て、驚きに金斗羅は金色の眼を見開いた。

「・・・長は、拙者だ！殺したいというのならば、この首を取れいっ！」

盛り上がる筋肉、それで一旦の血止めとして、そのまま大男は全身のばねをつかつて、碌に動かぬ右腕に代わり、左手で風を纏った豪腕を放った。近すぎる。金斗羅は金の短剣で真っ向から男の拳を受ける。

「・・・っぐ」

男によつて放たれたカマイタチによつて、両頬と両腕がそれぞれ裂け、そのまま風圧によつて飛ばされる。

「アンタ、正気か・・・？」

先ほどの自身の動作に耐え切れず、ぼたぼた、ぼたぼたと男の腕の付け根から大量の血がまたも噴出す。

「その方にはわからぬであろうな」
ぼつりと、漏らした。

先々代の長の息子として生まれていながら、この身はどうしようもなく無才であった。そして、萌黄詞。才能に恵まれ生まれた兄の子。けれど、未来視の異能も持ち合わせていたが故に、里人皆に嫌われ不気味がられ、感情の表現の仕方まで無くしてしまった子。本来なら輝かしい未来が待ち受けていた筈なのに、味方などもう自分の他にはいない。あの子が縋れるのはこの里において拙者だけなのだ、言われなくてもわかっている。

才能などない。そんな身でも、それでもあの小さな甥っ子を守るうと、そう決めたのだ。

だから、駆ける。

勝てるか勝てないかなど、この際はどうでもいい。

どうせ、老い先短い身の上だ。勝てないのならば、せめて道連れにして連れて逝く。

「ああああー！！！！！！」

気合を言葉にして吐き出す。大音声を大地にまで響かせて、ぼたぼたと外からも内からも血塗れになりながら青年に向かって疾走する。

「バクおじい・・・っ！」

その時、聞こえてはいけなはずの音が聞こえた。

「萌黄詞っ・・・!?!」

ぎよっとして、緑暴は翠色の衣に身を包んだ幼子を見た。感情も乏しい顔に汗の玉を浮かべて、萌黄詞は駆けていた。

「・・・っ！」

血塗れの叔父の姿を見て、萌黄詞は息を呑む。次の瞬間、それは過去の災害の再現のように沸き起こった。

「バクおじいに・・・てをだすな・・・っ」

ゴウ、と沸き起こる大竜巻。それを両腕に宿して、萌黄色の髪の毛端もいかぬ幼子は空に浮かんでいた。三つ網が風に揺れる。

「・・・なっ」

桁違いの風使いの異能。

近づいたもの全てを切り裂く、あれは風の要塞だ。

「そいつが、本当の長の跡継ぎだよ」

まるで、はじめからそこにいたかのように、茶色い猫っ毛に青い瞳の少女が音もなく現れ言う。

「さあ・・・約束だよ。金斗羅。『アレ』を殺して」

そうして、まさしく大昔の書物に出てくる悪魔のように、甘やかに少女は囁くのだ。

「あんな、子供を殺せっていつのかつ・・・!」

感情の抜け落ちた顔で、萌黄詞は巨大な竜巻を従えながら、そんな風に自分を見て葛藤する災いの駒を見ていた。

続
く

05・風使い（後書き）

とうわいで五話でした。
金斗羅はヘタレ。

06・1人目（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回の話は疾風族の里編最終回、というわけで叔父さんと甥っ子さんメインに据えてみました。

ちなみに、金斗羅の特異能力を具体的に描写していないのはただの仕様です。

次章で金斗羅と夜月族の能力、金斗羅の名前の由来は出てきます。

06・1人目

ほんとうにわかっていたんだよ。

ぼくにはうんめいをかえることなんてできないって。

だっていつだってぼくは、ただやくそくされたおわりをみる、それだけだったんだから。

それでも、それでもね、なにもしないのもやっぱりいやだった。

それだけなんだよ。

06・1人目

自分よりも3歳ほど年上だった妻は、やはり当然の帰結のように、自分よりも早い寿命を迎え、ベットに深く身を沈めながら、目を細めて拙者にこう言った。

「ごめんなさいね」

そう、本当にすまなさそうに口にして、うつらうつらと彼女は言葉をついでゆく。

「貴方を1人にさせてしまっ」

妻との間に生まれた子供は全部で6人いたが、全て女の子ばかりで、その末の娘もあと3ヶ月もすれば嫁に行くことが確定していた。そつと妻の手を握る。

「そんな心配、そなたがすることではない。拙者は大丈夫だ」

安心させるように微笑みかけてそう口にしたのに、妻は更に悲しそうに顔を曇らせて「貴方は、寂しがりだから」といって泣きそうな顔で笑った。

妻とは幼馴染で、はとこだった。当主の跡継ぎ兄弟の遊び役として幼い頃から一緒に育てられた。

才能に溢れた兄と、長の息子とは思えぬほどに風の才に恵まれていなかった弟。自然と比べられることが多い自分達に、そういう感情を持ち込まずに接したただ一人の女の子。

容姿は並だけど、笑えば愛嬌があつて可愛くて、年上なのに天真爛漫で子供っぽい、かと思えば大人のような聡さも時には持ち合わせていた彼女に惹かれたのはいつだったのか。でも、告白してきたのは彼女からだった。

「あんたは、寂しがりだから、だから私はずっと一緒にいてあげる」体の大きさと身体能力を除けば、全てにおいて兄に劣っていた拙者にとつて、それが唯一、兄よりも自分を選んでくれた者の言葉だった。

勿論、兄者のことは尊敬している。だけど、彼女が自分をとつてくれたから、1人でも兄よりも自分を肯定してくれるものがいたから、だから拙者はあまりに違いすぎる兄をそのときになって初めて素直に認められるようになったのだ。

そうだ、自分は決して強いわけではない。そのことは自分自身よく知っている。

でも、それでもいいのだと、彼女が自分を認めてくれたから、だから自分はこれでいいのだとそう思ったのだ。自分にとって彼女はそういう人だった。

その、彼女の人生ももう終わる。

「ごめんなさいね・・・ロケバク緑爆。出来たら貴方が・・・」

その続きを彼女がいうことはなかった。まるで眠るように、まどろみに身を落とすように、そんな風にして彼女は死んだ。

葬儀は慎ましく行われる。末の娘も僅かな間だけ参列して、すぐ

に未来の婿殿の下へ向かった。もう、この家への興味など失せたかのように。振り返りもせず未来だけ見て、娘は通り過ぎていく。それぞれの未来を描いて過去を置き去りにする。

灰になってまかれた妻の亡骸、白く染まった妻の遺髪を祭壇に置いて、広い家で1人。

かつて賑やかだったはずの家に1人つきり。

・・・ああ、寂しいな。

1人は寂しい。

1人は虚しい。

1人は、苦しいなあ。

1人は、辛いわな。

がらんだうの部屋。誰も迎えてくれるものなくなった家。そうして、外に目をやって、嗚呼と思った。

萌黄色の三つ綱をたらした幼子が1人、そこにはいた。

幼くして、母を亡くした萌黄詞。兄の息子でありながら、その生まれ持った異能を不気味がられ、大勢の大人に囲まれていながら、ひとりっきりの子供。

兄は萌黄詞を愛している。だが、兄にとって優先するべきは子供ではなく、疾風の民と里なのだ。長というのは、総じて忙しい。いくら愛情をもつていようと其れを示せるかどうかはまた別なのだ。

「バクおじい」

無表情、無感動にすら見える声と表情。子供らしくないと、不気味だと里人が言う其れ。だが、それは里人に心を傷つけられ続けた優しいこの子が受けた、心の傷の深さをあらわしたものなのだ。

滅多に逢えぬ父親の代わりのように、そつと控えめにすがり付いてくる小さな手。

そうだ、この子と自分は・・・同類だ。

そうさな、1人は寂しい。1人は虚しい。

だから、そのすがり付いてくる小さな手をとった。その手は拙者にとつても、救いであつたのだ。

2人なら、寂しくはないなあ。

1人で生きていけるほど人は強くはない。人をベースに人から生まれた人鬼もそこは同じなのだ。

拙者はこの小さな甥っ子に救われた。たとえ無才な身だとしても、それでも、この子、萌黄詞を守ろう。共に生きよう。古い先短い身の上だけど、それでも縋りついた手を離したくはなかった。

それだけだった。

それでも、それで充分だった。誰かを守ろうと思うのに、それ以上は必要なかった。

* * *

翠の衣をなびかせて空に浮かぶ、萌黄色の三つ網と、額に緑のバシダナを巻いた幼子。年端も行かぬ幼さだというのに、その子供は歳に似合わぬ才を顕わに、緑の竜巻を従えて疾風族の里を見下ろしていた。

ずっと、指を立てる。そして、その小さな人差し指を、無感情な顔をしたその幼子、萌黄詞は、黒髪の男に向かって指差した。

「ッ！」

ゴウツ、とそんな耳を劈くような風の圧縮音を立てて、萌黄詞の手から生まれた竜巻は男に向かって飛ぶ。それをすばやい跳躍で避け、黒髪の男、金斗羅は、巨大竜巻から逃れようと、複雑に入り組んだ路地と家々に向かって駆けた。

風の暴力、圧倒的な異能の力で生まれた其れは、家々を飲み込み、薙ぎ倒して進んでいく。

（なんて、無茶苦茶だ）

人工的に創り出された超自然物。矛盾しているようだが、そうとしか言いようのないその力はとんでもないものだ。こんな現象を操るのがこんな小さな子供だというのは一体何の冗談か。

空に浮いたままの萌黄詞の手から次から次へと竜巻たちが生み出

され、それは獵犬のように金斗羅を追っていく。里中無茶苦茶だ。そんな、一步間違えれば確実に風の餌食となる状況で、金斗羅は今更ながらに覚悟を決めた。

あの子供を殺す。

だから、金斗は飛んだ。金皇鬼を右手に、左手は空手で、幼子が今放った竜巻に向かって飛んだ。

「・・・ッ」

萌黄詞は驚きにだろう、無表情な顔で、僅かに目を見開く。それを見ながら、金斗羅は竜巻のある一点に向かって真っ直ぐに金の短剣を突き刺し、そのまま、それを軸に竜巻の真上に向かって飛んだ。ガツと、風を作り出す間もなく、刹那に現れた黒髪の人鬼におさげを掴まれ、大人の男をも支える重さに耐え切れずに風に加護を失い、地上に向かって落下していく。その最中、金斗羅は右手に金皇鬼を手にして、今すぐここから逃げ出したい自分の気持ちと戦いながら、慈悲のように目を瞑った。だから、走りこむ陰も見ず、地上に着いたときがこの子供を殺す時だと、そうそんな覚悟を決めていた。

そして、刃を肉に沈ませる。

「バクおじい・・・ッ」

決ったのは、左手で握りこんでいた三つ網の主ではなく、緑爆の割り込んで入った左手の掌だった。

ぶちぶちと、千切れる音がする。皮膚が千切れている。掌のど真ん中に金の刃を受けながら、そのまま根元に押し進むようにして、大男は金斗羅に向かって手を突き出し、身体を捻って、金斗羅の腹部をけりつけた。

無茶な姿勢で打ち出された其れは、本来の威力までは発揮されなかったが、体重がのった豪足を前に、金斗羅は5mばかり飛ばされる。反動で、幼子の髪も手放した。

「ぐっ・・・」

「おぬしは・・・」

血反吐を吐くようにして、緑爆は怒りの声を上げた。

「おぬしは、どこまで下種なのだ！このような、幼子に手をかけようとは、恥を知れっ！」

カツと、いつも細めている目を見開き、動かない右手や、右肩や左手のひらから流れる大量の血もそのままに、それでも緑爆は戦意を漲らせて、型を取り、そしてそのまま風の刃を纏って男は駆けた。「ウオオオオオオー……！！」

最期の命を燃やすような大音声を上げて、男は駆ける。それを見て、金斗羅は思い知った。この男は本気だ。止まる気などないし、自分を本気で殺しにかかっていると。そう、だから、金斗羅が己で考えるよりも先にその右手が動いた。

「だめ……っ」

大男を殺す為だけに放たれた無我の一閃、それを風による瞬間加速によって入れ替わるように受けたのは、幼子だった。いや、その表現は正確ではない。その無意識によって放たれた金斗羅の一撃の前に、幼子を入れ替わりにすらなれなかった。

刃は萌黄詞の肺ごと、庇おうとした叔父の緑爆を貫いていた。

二対の金の瞳が動揺に揺れながら、萌黄詞を見る。叔父のごっこつした戦士の手が優しい動きで萌黄詞の白い頬に這わされる。

「萌黄詞、何故……」

信じられないような、喪失感に襲われた目をしてそんな言葉を漏らす叔父を前にして、萌黄詞は、ああやはりこうなっちゃったかと思っただけだ。

たとえ、運命を変えようとしてもこの結末になることはかわらない。そのことは昔っからずっと、誰でもない萌黄詞自身が何よりも知っていたこと。

（それでも、それでもね……）

かわらないかもしれないけど、それでもやっぱり何もしいよりはよかった。

これで、よかった。

きつと、なにもしなかったら、それこそ自分が許せなかったから。

「バクおじい……」

必死に手を伸ばした。ひゅーひゅーと、息が漏れる。自分の声がちゃんと発音できているのか、自信がない。がたがたと震える指で大きな叔父の体を目指して彷徨わせる。指の感覚がもう遠い。

(ごめんね)

「ぼくもね……まもりたかった……よ」

いつも自分を守ってくれた大きな背中と手が好きだった。自分とはまるで違う優しい笑顔が好きだった。沢山のものを貰ってきた。嬉しかった、楽しかったよ。でも、もう返せない。

もう、自分は何も返せない。

(ぼくはね、バクおじいを、ぼくもね、まもりたかったんだよ)

いつもまもってくれたぶん、それをありがとうをかえしたかった。ほんとうはわかっていたよ、この結末も。

でも、それでもぼくもバクおじいのように戦って守りたかったんだ。結末がわかっていいるからって諦めるのは、それはとても嫌だったんだ。もう、諦めるのは嫌だったんだ。疲れたよ、苦しいよ、逃げたくないよ。もう、取り残されるのは嫌だ。

(ごめんね)

嬉しくてもね、悲しくてもね、顔に出せなくて、でもバクおじいだけが気付いてくれた。そんなこととか、母が死んだ夜、忙しい父や、それまで可愛がってくれたのどこかにいつてしまった女の人たちと違って、ただ1人何もかわらず、自分の頭を優しく撫でて一緒にいてくれたこととか、凄く嬉しかったんだよ。伝えたい言葉は沢山あるんだよ。いっぱいのがとうをあなたに伝えたい。

でも、もうその術はない。

目蓋が重い。重い。視線がぼやける。もう見えない。ここで目を本当に閉じたらもう、本当にお別れだ。そのことを誰より萌黄詞は知っていた。

ああ、伝えなきゃ。これだけ、これだけは伝えなきゃ。

「あり……が……と……う」

ぼとりと、伸ばされた紅葉のような手が力を失い、地面に落ちる。今年6歳になったばかりの子供はもう、事切れていた。

「あ、あ」

死体なんて何度も見てきた。それでも、緑爆は喪失感を隠せず、声を低く漏らして、そして激情のままに、血まみれで穴の開いた左手を握り締めて、大男はなんの戦術も考えることすらなく、甥っ子を死に追いやった男に向かって殴りかかった。

「ああああー！！！」

いつの間にか、とても静かに涙を一筋流していた金斗羅は、これまた何一つ考えることもなく無意識に任せるままに、今死んだ子供に刺さっている刃を抜いて、それで緑爆の首を両断した。

さくりと、まるでスイカを切り落とすかのような身軽さで、大男の首と胴が離れる。

「あ………」

本当に、そんな風にあつさりと、彼らの生は終わった。

軽い、刃はあまりに軽い。命はこんなに重いはずなのに。

「……ぐ」

唐突に、吐き気がこみ上げてきて、金斗羅はその衝動のままに胃液を吐いた。

「が……ふ、う……っ」

気持ちが悪かった。胃の中が気持ちが悪かった。

人間ならば、これまで食べる為に何度か殺してきた。赤子のほうが肉も柔らかいし、あとくされもないからと、殺して食べたことが何度もあった。

だけど、けど……同族を殺すのは、人鬼を殺すのは文字通りこれが初めてだった。

人鬼は人間から生まれた。人鬼自体、人間をベースに造られた人造亜種で、価値観や寿命や他にも色々違いはあれど、それでも言葉も通じるし、知能も同程度で、近い生き物ではあった。だから、長を殺す事だって、胸糞悪くても大丈夫だと思った。だが、大違いだ。

どんなに近いようでも、人間と人鬼は別種の存在。その同族を、俺は殺した。その事実は思わぬ以上の圧迫感となって金斗羅を蝕む。

吐き気が止まらない。無様な姿を晒しながら、心のままに金斗羅は吐き続けた。

それを青色の眼が、まはこ観察するように無感動に見続ける。

音もなく、匂いもなく、美しい容姿をした小柄な少女は、もうただの死体になりさがっただけの幼い子供の頭をぐしゃりと踏みつけ、血まみれ首なしで転がる大男の腹を椅子代わりにして腰をかけ、そして金斗羅にむかって「気はすんだ？」そんな言葉を、くすりと笑いながらかけた。

血の気の引いた顔をして、金斗羅はそんな少女・・・青雷を見る。「酷い顔。あーあ、男前が台無しだね」

「オマエ・・・」

ちやかすような声をかけ、猫のような笑顔でくすくすと笑う少女に、怒りと屈辱と嫌悪と侮蔑がない交ぜになったような声を漏らす金斗羅に対し、「なんて顔をしているの」なんていって少女は楽しそうに青年を観察した。

「命じたのはボクだけど、やったのは金斗だよ」
くすくすくすくす、と少女は笑う。

「そんな風にする資格、ないんじゃない？まさか、これで旅やめるなんて言わないよね・・・？ま、村を破壊したのは殆どあの子だけど、疾風族を金斗が壊滅させたーって噂すぐひろまると思うし、まさか金斗、にげられるなんて世迷い事は考えてないよね？」

この手は、既に紅く染められた。そのことを嫌が応にも少女は自覚させる。

「感傷タイムは、そろそろ終わりにしなよ。そら、彼らがやってきた」

ぞろぞろ、ぞろぞろと緑爆の命を聞いて、一度はひいて隠れていた疾風族の戦士たちが武器を手に現れる。

「さっさとしないと囲まれちゃうよ？」

「・・・乗れ。逃げるぞ」

ぼそりと、感情も血の気もひいた声でそう青雷に言葉をかける。

「なんだ？戦わないの」

えー、残念なんて能天気ですら聞こえる愛くるしい声でかけられる声を見無視して、金斗羅は疾風族の里を後に駆けた。

もう、何も考えたくはなかった。

続く

06・1人目（後書き）

というわけで、疾風族の里編でした。
今回は、登場人物プロフィール？で、萌黄詞と緑爆の紹介になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3553w/>

人鬼

2011年10月8日03時17分発行